

「身を洗ってきよくなれ」

Ⅱ列王記5章9－14節

「こうして、ナアマンは馬と戦車をもって来て、エリシャの家の入口に立った。エリシャは、彼に使いをやって、言った。「ヨルダン川へ行って七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだは元どおりになってきよくなります。」しかしナアマンは怒って去り、そして言った。「何ということだ。私は彼がきつと出て来て、立ち、彼の神、主の名を呼んで、この患部の上で彼の手を動かし、このツァラアトに冒された者を直してくれると思っていたのに。ダマスコの川、アマナやパルパルは、イスラエルのすべての川にまさっているではないか。これらの川で洗って、私がきよくなれないのだろうか。」こうして、彼は怒って帰途についた。そのとき、彼のしもべたちが近づいて彼に言った。「わが父よ。あの預言者が、もしも、むずかしいことをあなたに命じたとしたら、あなたはきつとそれをなされたではありませんか。ただ、彼はあなたに『身を洗って、きよくなりなさい』と言っただけではありませんか。」そこで、ナアマンは下って行き、神の人の言ったとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。すると彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった。」

1. イスラエルの民の不信仰と将軍ナアマン

旧約聖書の時代、イスラエルの民は、神様に導かれ、神様と共に生きる群れであり、特別に選ばれた群れでした。

しかし、旧約聖書を読みますと、神様がどんなにイスラエルの民を愛しても、どれほど熱心にイスラエルの民を導こうとされても、イスラエルの民がその神様に従いきれずに不信仰に陥ってしまう様子が書かれています。

それでも、不信仰なイスラエルの民をなんとか、導こうとされる神様の愛と熱心の物語が聖書に描かれているのです。

聖書に書かれていることは、この世界を作られた神様がおられて、そしてその神様が今も生きておられて、私たちは、その神様と正しい関係を持って生きることが一番の幸せであるということです。昔も今も変わらずに大切なことは、私と神様との関係です。

出エジプトを経験したイスラエルの民は、モーセを通してシナイ山で律法を与えられました。十戒の前半部分では、神様と人間の関係がいかにあるべきかということが語られています。イスラエルの民は、律法を通して、リーダーであるモーセを通して、あなたがたはどのような存在であるのか、どこに向かって進むべきかを教えられるのです。

それなのに、イスラエルの民は従いきれないのです。出エジプトの後、約束の地カナンを目指して導かれるイスラエルの民でしたが、カデシュ・バルネアという場所では、事件を起こしてしまいます。

約束の地カナンを目前にして、選ばれた12人が新しい地を偵察に行きましたが、その内、10人は、確かに良い地であるけれども、すでに住んでいる人たちが強そうだから、征服するのは難しそうだと言い出したところ、イスラエル民は恐れと不安に支配されて、前に進むことができず、神様をも怒らせてしまい、荒野にとどまることになってしまったのです。

それから40年、ようやくイスラエルの民はカナンの地に向かって進みだしました。そうして、カナンの地に移り住んだイスラエルの民ですが、やはり、神様との関係を忘れてしまって、自分勝手になってしまうのです。ついには、ソロモンの息子レハブアムの時代にイスラエルの王国が分裂するにまで至ります。

王国の分裂後、北イスラエルの王ヤロブアムは、自分の部族のために金の子牛を用意して偶像礼拝を始めます。それは、「ヤロブアムの罪」と呼ばれて、北イスラエルの歴代の王様も、偶像礼拝を続けてしまうのです。

今日の聖書の箇所である、Ⅱ列王記5章は、北イスラエル、ヨラム王の時代ですが、そのときも、ヤロブアムの罪、偶像礼拝が続けられていたのです。

Ⅱ列王記3章3節。

「しかし、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を彼も犯し続け、それをやめようとはしなかった。」

そのようにして、不信仰にいたり、罪を犯し続けるイスラエルの民に、神のことばを語り続けていたのが預言者エリシャでした。

預言者エリシャは、ヨラム王に対して、そして人々に対して、語り続けていました。私たちの本当の王は神様であり、神様の言葉を聞いて、神様と共に生きていくことが必要だ。

そんなときに、預言者エリシャの言葉を聞いたのはイスラエルの王ではなく、イスラエルの民でもなく、なんとアラムの王の将軍ナアマンだったのです。

Ⅱ列王記5章1節。

「アラムの王の将軍ナアマンは、その主君に重んじられ、尊敬されていた。主がかつて彼によってアラムに勝利を得させられたからである。この人は勇士で、ツァラアトに冒されていた」

ナアマンは将軍ということで、力もあり、能力もあり、高い地位にあつて、多くの財産も持っていたようです。アラムの王様からも、また人々からも信頼され、尊敬され、うらやましいと思われるほどに恵まれた環境に置かれていました。

しかし、ひとつのことがナアマンを悩ますのでした。それが、ツァラアトという皮膚の病気でした。この病気は治らなかいかもしれない。どんなに恵まれていたとしても、このツァラアトがナアマンを悩ますのです。

そんなときに、ナアマンの妻に仕えていたひとりの女奴隷がイスラエルの預言者の話をするのです。この女奴隷は、かつて争い、勝利をおさめたイスラエルから、連れてこられていた女奴隷でした。

女奴隷である若い娘は、どんな医者であっても治すことができなくとも、私の国イスラエルの預言者エリシャであれば、その病気を治すことができるというのです。

Ⅱ列王記 5 章 3 節。

「その女主人に言った。「もし、ご主人さまがサマリヤにいる預言者のところに行かれたら、きっと、あの方がご主人さまのツァラアトを直してくださるでしょうに。」」

ナアマンはこの言葉を聞いて、たくさんの銀や金、贈り物を持ってエリシャを訪ねるのです。

なんとしてでも、この病気を治してもらいたいというナアマンの期待が感じられます。それだけでなく、これだけたくさんの贈り物を持っていけば、十分だろうという、金や自分の高い地位でなんとかしようとする、ナアマンの高慢な態度も感じられます。

ナアマンと同じような、なんでもお金で解決、なんでもこの世の方法で解決、なんでも自分の知恵や力で解決という態度は、イスラエルの民の態度であり、またここにいる私たちの態度でもあるのかもしれない。

2. ナアマンのいやし

Ⅱ列王記 5 章 9 – 12 節。

「こうして、ナアマンは馬と戦車をもって来て、エリシャの家の入口に立った。エリシャは、彼に使いをやって、言った。「ヨルダン川へ行って七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだ元どおりになってきよくなります。」

しかしナアマンは怒って去り、そして言った。「何ということだ。私は彼がきっと出て来て、立ち、彼の神、主の名を呼んで、この患部の上で彼の手を動かし、このツァラアトに冒された者を直してくれると思っていたのに。」

ダマスコの川、アマナやパルパルは、イスラエルのすべての川にまさっているではないか。これらの川で洗って、私がきよくなれないのだろうか。」 こうして、彼は怒って帰途についた」

高慢な人というのは、自分の思い通りにならないと、怒りがわいてくるようです。

ナアマンは立派な将軍らしく、馬と戦車をもって、エリシャの家の前に立ちましたが、エリシャが顔を出さず、使いをよこして、「ヨルダン川へ行って七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだは元どおりになってきよくなる」と、言うのです。

自分が軽く扱われるようなエリシャの対応と、そしてあの汚いヨルダン川までわざわざ行って、しかも7回も体を洗うように指図されたことに、ナアマンは怒りをあらわにします。

預言者エリシャが直々に、特別な治療をしてくれるのではないのか。自分の国の川のほうがきれいではないか。

なぜ将軍の私が、ここまできて、そんなことをしなければならないのか。自分は将軍であり、自分は特別な存在だ、と彼は怒って、帰ろうとするのです。

しかし、そんなナアマンが謙遜と信仰を教えられるのです。

Ⅱ列王記5章13－14節。

「そのとき、彼のしもべたちが近づいて彼に言った。「わが父よ。あの預言者が、もしも、むずかしいことをあなたに命じたとしたら、あなたはきっとそれをなさったのではありませんか。ただ、彼はあなたに『身を洗って、きよくなりなさい』と言っただけではありませんか。」

そこで、ナアマンは下って行き、神の人の言ったとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。すると彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった」

ナアマンは、しもべの一言で、不思議と心が変わりました。怒りが取り除かれ、エリシャの言葉に素直に聞き従ってみようという気が起こされたのです。

そうして、エリシャの言葉の通り、ヨルダン川に七たび身を浸すと、なんと「彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった」というのです。

ナアマン自身が一番驚いたことでしょう。「自分の国の川のほうがきれいだ。なぜヨルダン川で体を洗わなければならないのだ。」と考えていたのに、素直に預言者の言葉を聞いてその通りにしてみたら、いやされたのです。

もちろん、ヨルダン川に特別な力があつたわけではありません。預言者を通して語られた神様のことに聞き従ったからこそいやされたのです。

ナアマンのようにどんなに立派であっても、大きな力を持っていたとしても、人々から尊敬されていたとしても、解決できないことがあります。ナアマンでさえも、ツアラアトの前では、無力、弱い存在であり、希望を持つことさえできなかったのです。

そのようなとき、私たちは神様の言葉を求めるのです。神様に聞き従うのです。

ナアマンのいやしを通して、私たちは神様の声を聞くこと、神様と語り合うことの大切さ、高慢を捨てて、強がることを捨てて、自分の無力を認めること、自分の弱さをさらけ出すことの大切さを教えられます。

「幼子のからだのようになり、きよくなった」

皆さん、幼子のからだのきよさをご存じでしょうか。もしかしたら、「私の肌は幼子のようきれいだわ」と、信じきっている方もおられるかもしれません。

私自身も、キラキラサーブの方々の肌を見慣れているからなのかもしれませんが、自分の肌はまだまだ、ピチピチしていると鏡の中の自分を見つめながら思うことが良くあります。

でも、1歳の娘を抱きながら、ふと鏡を見たときに、「全然違う！」ということ気づかされるのです。比べ物にならないほど、幼子にからだはきれいだということです。

そして、神様のいやしはそれほどまでに、完全ないやしであり、それまでの自分とは比べ物にならないほどにきよめられるのです。

前と比べてよくなったとか、少しはましになった、ということではないのです。

神様がいやしてくださるならば、それは完全にいやされるということであり、神様が愛するというのであれば、それは完全な愛であり、神様があなたを導くと約束してくださるならば、それは完全な導きであり、「私はあなたを知っている」と神様が言うのならば、それは完全に知っているということであり、「私はあなたを助ける」と神様は言うのならばそれは確実に助けるという約束なのです。

3. 十字架の赦し

新約聖書ではこのように約束されています。

I ペテロ 2 : 24 - 25

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです」

ナアマンがエリシャの言葉に聞き従い、幼子のようきよめられたのと同じように、私たちもまた、聖書のことばを受け入れるならば、イエス様の十字架によって完全にいやされ、完全にきよめられ、そして、全く新しい人として生まれ変わり、たましいの牧者であるイエス様と一緒に生きる者になるのです。

ナアマンがその病に苦しんでいたのと同じように、私たちもまた、自分自身の罪のゆえに苦しむことがあります。

私たちの罪は、ナアマンがそうであったように、高慢であり、自分中心であり、自分の力でなんとかしようと、自分が神のようになることです。

しかし、ナアマンはその病を通して、自分の無力さを受け入れ、神様の言葉に聞き従うことを教えられました。

同じように、私たちもまた、病や、苦難や、様々な問題を通して、自分の力ではなくて、イエス・キリストにより頼み、謙遜さを学び、主にゆだねる信仰を与えられる経験をするのです。

ナアマンが「病を抱える恵み」を経験したのと同じように、私たちも「病を抱える恵み」、「苦難を経験する恵み」を経験するのです。そして、羊飼いであるイエス様に守られて、導かれて生きることの幸せを知るのです。

旧約聖書の時代から、変わらずに今も生きて働いておられる神様がおられます。

エジプトからイスラエルの民を救い出し、カナンのに導くと約束された神様は、それからイスラエルの民を守り続けられました。

不信仰な民を懲らしめながらも、見捨てることをせずに、人々を導かれる神様がおられます。神様により頼むならば、恐れることはないのです。

最近の早天祈祷会では申命記を読んでいます。モーセがイスラエルの民に対して、出エジプトの出来事と荒野の旅における神様の恵みを思い起こさせ、そしてこれからも、この神様に信頼して、聞き従うようにと、最後の説教をしています。

申命記1章29－31節

「それで、私はあなたがたに言った。「おののいてはならない。彼らを恐れてはならない。あなたがたに先立って行かれるあなたがたの神、主が、エジプトにおいて、あなたがたの目の前で、あなたがたのためにしてくださったそのとおりに、あなたがたのために戦われるのだ。また、荒野では、あなたがたがこの所に来るまでの、全道中、人がその子を抱くように、あなたの神、主が、あなたを抱かれたのを見ているのだ」

イスラエルの民を導いた神様が、今も、羊飼いのように私たちを導こうとされているのです。いのちをかけて私たちを愛してくださっているイエス様が、私たちに先立って歩かれています。

私たちには、先が見えなくて、将来に不安を覚えることがあるかもしれませんが、恐れる必要はないのです。私たちの主であるイエス様が戦ってくださるからです。

荒野において、主が子どもを抱くようにして、イスラエルの民を守ってくださったように、たとえどんな困難があったとしても、イエス様が私たちを優しく抱きしめてくださり、主の御手の中で、安心して過ごすことができるのです。

早天祈祷会で使っている、ディボーションのテキストにはこんな話が載っていました。

「ある若者が、エーゲ海の小さな離島で、一人で暮らしている修道士のもとを訪ねました。その修道士は、高い岩の上にある小さな部屋で祈りつつ、余生を送っていました、若者が「最近も誘惑と戦っておられますか」と聞くと、修道士は「最近では神様と格闘している」と答えました。

「神様と戦っているのですって？神様との闘いに勝つことを願っているのですか」と聞くと、修道士は「いや、私は神様に負けるために戦い続けているのだよ」と答えた」

神様に勝つ戦いではなくて、神様に負ける戦いがあるのだということです。

私たちはつい、自分の願いや求めることを神様に向かって祈り、神様を負かして、自分の言う通りに神様を動かそうとしてしまうことがあります。

そうではなくて、神様に負けること。自分の計画を捨てて、自分の考え方ではなくて、神様のなさろうとしていることにこの身をゆだねるということ、神様に聞き従うということが必要であり、その先に、大きな祝福と希望が備えられているということがあるのです。

イスラエルの民が経験し、ナアマンが経験したように、私たちが自分では乗り越えられないような試練は、神様を見つめさせ、神様に抛り頼むようにさせてくれます。私たちは、困難を通して私の人生を導かれる神様に助けを求め、神様に期待するようになるのです。

預言者エリシャはナアマンに言いました。

Ⅱ列王記5章19節。

「エリシャは彼に言った。「安心して行きなさい。」そこでナアマンは彼から離れて、かなりの道のりを進んで行った」

「安心して行きなさい」

自分の力に頼らずに、主の言葉に聞き従い、きよめられることを経験したナアマンは、これから何があっても大丈夫だ、これからも、主の言葉に聞き従い、主にゆだねていくことができるだろう。だから、「安心して行きなさい」。

昨日の新聞のコラムに、「ライナスの毛布」の話がありました。

「ライナスの毛布」とは、スヌーピーの漫画に出てくる、男の子が持っている青い毛布のことだそうです。

幼児が手放さない「安心の毛布」であり、幼児が一人で行動できるようになると親と離れる不安をなくすため、親代わりである毛布やぬいぐるみを持ち歩くということで、親と一緒にいるような安心感のよりどころだから、無理に取り上げてはいけないそうです。

「安心を与えてくれるモノへの執着は幼児だけではない。新型コロナウイルスの恐怖が心にわだかまる中、いつも通りの平穏な暮らしを支えている日用品や食料を買いだめしたくなる衝動も、一種の「安心の毛布」心理かもしれない」と書かれてありました。

私はこの記事を読んで、私にとっての「安心の毛布」はなんだろうかと考えさせられたのです。

私たちは、病を通して、事故や災いや、困難や弱さを通して、何を大切にするのかを試みられることがあります。本当の安心とは何かを教えられることがあります。

私たちが高慢を捨てて、自分の計画を捨てて、主により頼むときに、助けてくださるお方がいる、羊飼いである主が共にいてくださる。そのような安心が私にとっての一番の安心の毛布であると気づかされるのです。

神様との交わりを通して、主に聞き従うことを通して、週ごとにささげられる礼拝を通して、これからも主にいやされ、きよめられ、「安心していきなさい」と力付けられながら、主に導かれて安心して歩んでいきたいと思うのです。